

重陽神事、烏相撲

日付：9月9日

上賀茂神社の最も珍しい儀式のひとつに、上賀茂神社が古くからカラスと縁があったことにちなんだ「烏相撲」があります。この儀式では、白い衣を着て黒い帽子を被った男性がカラスの真似をする儀式や、近所の子供たちが上賀茂神社の神様への奉納として相撲をとる儀式も行われます。同じ日に、季節の儀式である「重陽神事（二重の九の儀式）」も行われ、縁起物であり日本文化の重要な要素の一つである菊が主役になります。

重陽神事

9月9日は、季節の移り変わりを告げる5つの伝統的な祭りの最後の日です。この日は、古くから長寿と厄除けを象徴する菊と関連付けられてきました。皇居ではかつて、この日に菊の露で湿らせた綿で身体を洗い、菊の花びらが入った酒を飲む習慣がありました。上賀茂神社では、この伝統を祝うために「重陽神事」（別名「菊の神事」）を行います。午前10時に神職の行列が本殿（主な本殿）に向かい、供物や豪華な菊の花を賀茂別雷大神に捧げます。この儀式は、本殿の扉が開かれ、高位の神職が中に入ってそこに祀られている神様のために、供物を祭壇へ置く、数少ない儀式の1つです。

烏の真似をする儀式

お祭りは、細殿と神聖な神山を象徴する立砂の前で続きます。烏相撲が始まる前に、白い衣を着て艶のある黒塗りの帽子を被った2人の男性が一時的に設置された土俵を清め、豊作を祈願する儀式を行います。彼らはカラスの動きを真似して、立砂に向かって9回飛び跳ね、矢と弓と刀を立砂に立てかけます。その後、この男性は座って、カラスの鳴き声を真似て交代で9回叫びます。この儀式の起源は、上賀茂神社とカラスをつなぐ古代の伝説にあるとされています。賀茂別雷大神の神聖な祖父が、三足の烏（八咫烏）の姿をして、日本の伝説的な初代天皇である神武天皇の案内役を務めたと言われています。

烏相撲

上賀茂神社の近所の少年たちが2つのチームに分かれて、1対1で相撲の勝負を行い、神様と、細殿内から烏相撲を眺める名誉巫女の斎王代を楽しませます。烏相撲は、稲刈りが始まる前に神々への奉納として相撲の試合を行っていたという伝統が起源であるとも考えられています。

菊酒

烏相撲の試合が終わると、この日のお祭りごとはこの儀式を見に来た人へ振る舞われる儀式用の酒で締めくくられます。そのお酒には黄色い菊の花びらが入っており、長寿と幸運をもたらすと信じられて

います。神職は、金色の鍋を使って小さな陶器のカップ（盃）に菊酒を注ぎます。お酒を飲んでいい年齢の方は古代の習慣に参加することが出来ます。